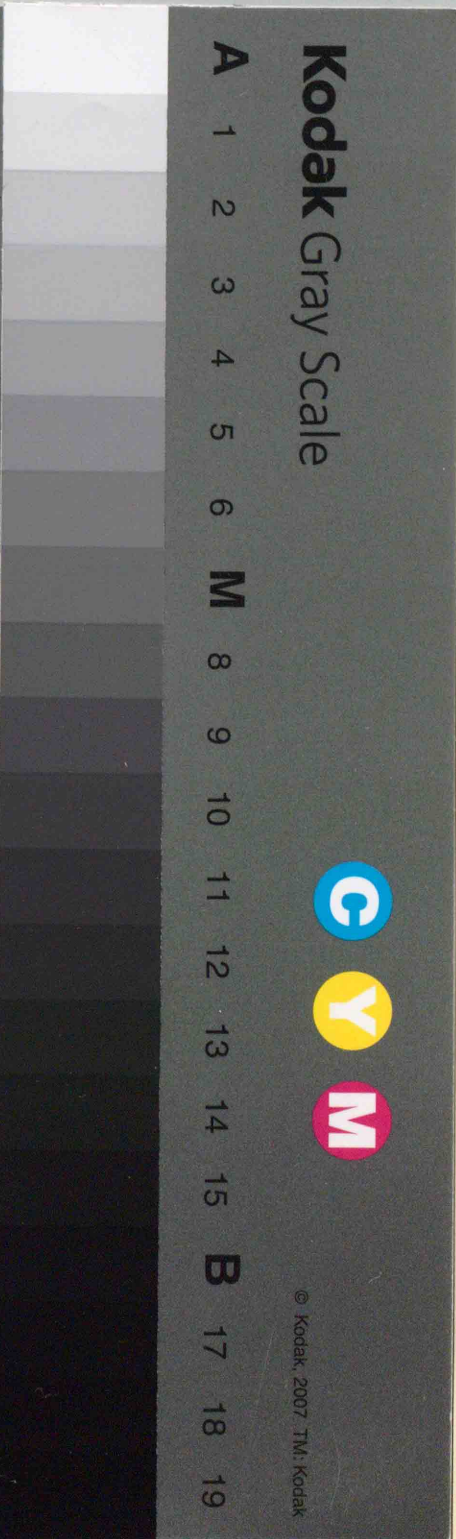
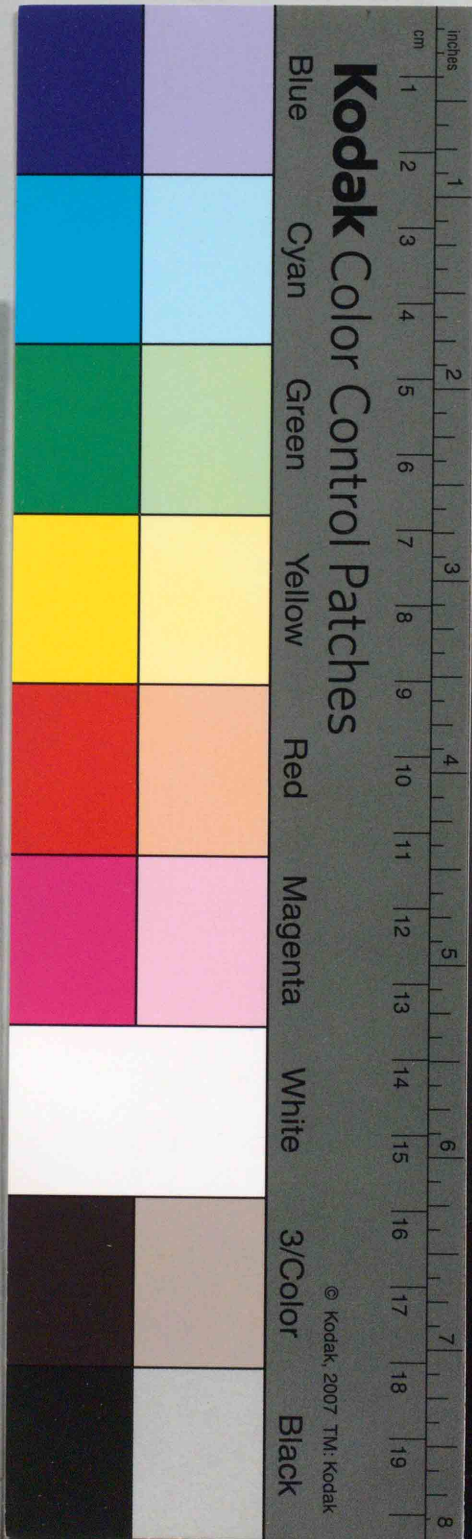


4a
810
明36

訂正
 中等國語讀本
 落合直文編
 卷五



42005

教科書文庫

4
810
41-1903
20000 65476

M36 1903



資料室

4a
810
明36

訂正中等國語讀本 卷五目次

- 一、年中行事……………一
- 二、春の巴里その一……………六
- 三、春の巴里その二……………一〇
- 四、春興(今様)……………一五
- 五、江戸……………一六
- 六、旅況の古今……………二〇
- 七、高山彦九郎……………二六
- 八、伊能忠敬……………三四

訂正中等國語讀本卷五目次



九、スエズ開鑿始末その一……………三八

一〇、スエズ開鑿始末その二……………四三

一一、ポートサイドより友人に寄する書……………四七

一二、舟路(新體詩)……………五一

一三、埃及……………五四

一四、植物の景觀と氣象との關係その一……………五七

一五、植物の景觀と氣象との關係その二……………六三

一六、わが小園……………六九

一七、武將の文事……………七三

一八、國語と愛國心……………七六

一九、國語國文の變遷……………八二

二〇、徳川光圀……………八八

二一、文貞公……………九四

二二、夢の跡(俳句)……………九九

二三、螢……………一〇〇

二四、鹽原……………一〇七

二五、ナイアガラ瀑布の記……………一一四

二六、英國人の探檢思想……………一二一

二七、亞米利加發見その一……………一二六

二八、亞米利加發見その二……………一三二

二九、亞米利加發見その三……………一三八

卷五目次終

訂正中等國語讀本卷五

一、年中行事

わが國にては、式日、大祭日には、日旗を掲げ、業を休み、家族團欒、冷酒を飲み、赤飯を食ひて、祝意を表するを、一般の習慣とす。

さて、新年には、門に、松と竹とを立て、注連繩、齒朶、交讓木、橙などを飾り、床の間には、三方に載せたる鏡餅の、齒朶、交讓木、小松、海鰻、橙などを飾られたる

を据ゑ、神棚、靈屋にも、注連繩を延へ、齒朶、交讓木を飾りて、ちひさき鏡餅を供ふ。かくて、一日より三日までは、一家、一堂に集りて、雑煮の餅を食ひ、屠蘇の酒を飲みて、新年を祝ふ。なほ、むかしの式によれる人は、七日に、若菜の粥、十五日に、小豆の粥を食ひ、十一日には、具足開とて、鎧に供へたる餅を煮て祝ふことあり。また、十六日には、奴婢に、一日の暇をとらせて、里に歸りて、遊樂するを許すことあり。これを、やどたり、又は、やぶいりといふ。七月の十六日にも、また、この事あり。

さて、また、歳のはじめには、産土神、氏神、及び、先祖の

墳墓に參詣し、又、親族、知人の家を訪ひて、新年の祝詞を述ぶ。かくて、童子は、紙鳶をあげ、童女は、羽子をつき、夜に入りては、雙六、かるたなどなして、戯れ遊ぶ。又、萬歳といふものゝ、素袍、烏帽子のいでたちにて、鼓を打ち、扇を鳴らし、大紋の袖を翻して、家ごとに、萬歳を唱へあるくが、これは、そのむかし行はれたる、踏歌のなごりなりとぞ。

三月三日は、昔は、上巳の節とて、艾餅よもぎもちを食ひ、桃花の酒を飲み、五月五日は、端午の節とて、粽ちまきを食ひ、菖蒲の酒を飲み、また、菖蒲を屋上に挿して、祝ひたりしが、今

は、新曆にて、桃も、菖蒲も、まだしければ、その事は、大かた、やみ、たゞ、三月三日には、童女の節供とて、床に、雛人形を祭り、五月五日には、童男の節供とて、門に、幟、鯉幟をたつることゝなれり。

七月十五日は、中元とて、親族の往來あり。又、この日は、盆とて、先祖の靈祭あり。盆は、もと、孟蘭盆にて、佛家の行事より出でたるものなり。十三日よりは、じまりて、十六日に終る。盆中は、墓前、靈前に、蓮の葉に盛りたる強飯ちかひを供へ、香をたき、燈籠をとす。また、神靈を慰むとて、人々あつまり、音頭をとりて踊ることあり。こ

れを盆踊といふ。九月九日は、重陽の節供とて、昔は、菊花の酒を飲み、栗くり子の飯を食ひたりしが、今は、季節の異なるために、二種の物をなれば、その事なし。

十二月は、歳暮の月なれば、家々に、煤はきの事あり。また、新年に用ゐるべきために、餅つきの事あり。かくて、三十一日の夜は、除夜といひて、一年の終なれば、神棚、靈屋には、神酒、神饌を供へ、家族、一堂に集り、夜半過ぐるまでは、起き居て、一年の間にありし事どもを語りあふ。十二時を過ぐるほどよりは、こゝかしこの寺にて百八の鐘といふをつきならしめて、歳の既に、暮

れたるを報ず。昔は、この夜、追儼といふ事ありしかど、今は、節分の夜に、福は内、鬼は外と、叫びて、いり豆もて、戸障子をうつことゝなりしかば、さることは、たえたり。(物集高見著日本人)

二、春の巴里その一

花開き鳥囀る陽春の頃は、人の心も浮きたちて、外がちなるは、東西の別あるべくもあらず。パークの祭過ぎて後は、春氣、俄に、迫れるこゝちして、昨日まで、寒げに見えし處々の噴水も、今日は、ぬるみて、その飛沫

の末の、霞にまがひぬるものどけし。並木の、青々と、芽を含みたるが、何町となく、うち續きて、うち見る末の、細く丸く、緑門のやりなるに、馬車どもの、引き連ねて、馳せ行くさまなど、畫のやりなり。

人の樂むべきは、この頃なり。人の遊ぶべきは、きのふけふなり。その行の、狂言じみてをかしきも、その時は、咎めず。その言の、まめ立たずして、人の願を解くも、この頃は、怪まず。

各劇場は、常に、開かれて、混雜する中にも、春は、一志ほ、盛なり。されば、オペラの前には、騎兵のたゞずまぬ

日もなく、花瓦斯の消ゆる夜もなし。舞踏は、さまざまの組合にて、處々に催され、假裝會、また、時々、行はれて、いづこも、いづこも、にぎやかなり。

公園の中にて、最も大なるは、ボアーといふ處なり。はじめ、その中に入れるものは、出口を失ひて、飢渴するものも少からずといふ。こゝには、大なる池ありて、あまたの遊客、ボートレースなどするに、鶯鳥、鶴などの戯れかゝれる、かの古の文王の圃も、かくやとさへ思はる。灌どもの多き中に、湯をさへに落せる、異様ならずや。一賭、萬金に價する競馬は、こゝの奥にて、

行はるゝが、見物人、山の如く、その狀、狂するが如し。

花は、植ゑられて、或は、モサイ、ク風に、或は、天然のままに、各、その専門家の意匠によりて、そだてられたるものなれば、見るに、飽くことなし。すべて、花は、室にて咲かせたるを、各公園、さては、道の邊に、壇を築きて、移し植うることなれば、四時の區別なきやうなれど、春は、一志ほ、色香をますのみならず、その種類も多ければ、目もあやに、うつくしきこと、えもいはず。

この頃は、躑躅、紫陽花、野菊、堇、水仙、釣鐘草など、御國にて、見馴れたるも多し。その道の人の話に、日本はか

り、花の種類多きはあらず。この品も、日本なり、かの花も、日本なり」と聞くに、いかで、忍び出づる事なからむ。そが中にも、菊と躑躅とは、ことに、歐洲の人士にもてはやさるゝも、めでたし。ある時、花の市ありしに、蘭の一ふさを、三千法にて買ひ取り、一夕の樂に費しゝ人あり。かゝるさまなれば、よき花を造り出でたるものは、一攫千金を得ること、さして、難事にあらずとぞ。

三、春の巴里 その二

繪畫、彫刻の博覽會は、このごろ、シヤンド、マルスに開

かれたり。繪畫は、二千餘點に達し、彫刻は、三百餘點と數へらる。いづれも、當世知名の人々の刀筆に成れり。場内の廣さは、我が上野博物館の敷地位はあるべきか。鐵骨玻璃張の建物なり。彫刻の大なるは、五六間以上なるあり。繪畫の大なるは、七八間に亘れり。歴史、風俗、肖像、景色など、さまざまに、書きわけたる、一日二日にては、見盡すべくもあらず。場内に、料理店あり。休息所あり。こは、巴里サロンといひて、我が美術展覽會の如く、私立のものながら、その規模の大なる、その結構の盛なる、たゞ、驚く外なし。集る人々は、老若男女、日々

に、數萬なりといふ。

日影うらゝかなる公園に、小兒などの數多、遊べる、いと愛らし。或は、象に乗り、或は、駝鳥に、車曳かせつゝ、ゆきかふなど、めづらし。殊に、盛沙などある處によりきて、彼の小さき手して、掬ひ上げては、下し、下しては、すくひ上げてして、何心なく、うち遊べるに、母なる人が、子守がてら、縫物せむとて、その物とり出すを、やがて、邪魔しつゝ、あまえかゝれるなど、西も東も、罪なきは、小兒なり。

金曜日は、慎み、木曜日は、遊ぶは、耶蘇教國の習なり。

さるは、一は、死し、一は、蘇生せし日なればなり。慎む日には、肉を食はず、遊ぶべき日には、大方、郊外に出づるが、五月十一日は、その當日なりしかば、汽車、汽船の割引などさへ行はれて、ことに、賑へり。富める人は、いふにも及ばず、貧しきものといへども、パンと葡萄酒とを携へ行き、芝生の上にて、その日を送るよ。

いつもあることながら、春になりて、殊に、多きは、コンミニヨンといふことなり。これは、男女十二歳に達すれば、寺に行きて、聖餐を受くる儀なり。男は、黒服にて白襟、女は、悉く、白装にて、頭髮にも、白布を被れり。か

くて、一家及び親戚に連れられて、式に赴く。そのさま、殊勝なり。昨日今日、大路小路を歩くに、この者に逢ふこと、數を知らず。こゝに、又、奇怪なる話あり。そは、五月五日、太陽、凱旋門の中央に没すといふことなり。こは、プラス、ド、ラ、コンコルドより、夕日を見ていひはじめし事なるが、そのもとは、この日は、即ち、ナポレオン第一世が、身まかりし日なればなり。これ、我が國の西郷星などいふ類にして、英雄崇拜の名殘、いと、ゆかし。

木の花は、桐、梨、林檎、その外、名を知らざるものにて、めでたきもあれど、御國の櫻に勝れるものはなし。並

木のマルニエーといへるは、この頃、盛なれども、こは、花を賞すべきものにあらず、その葉の青々として、水の滴るゝが如きが、めでたきなり。この國人は、日本には、春なしといへるが、われわれより見れば、かく、並木の青々と、まげれるは、何となく、花の散りたるが如き心ちせられて、こゝにこそ、春なきやうにも思はれたれ。(池邊義象著佛國風俗問答)

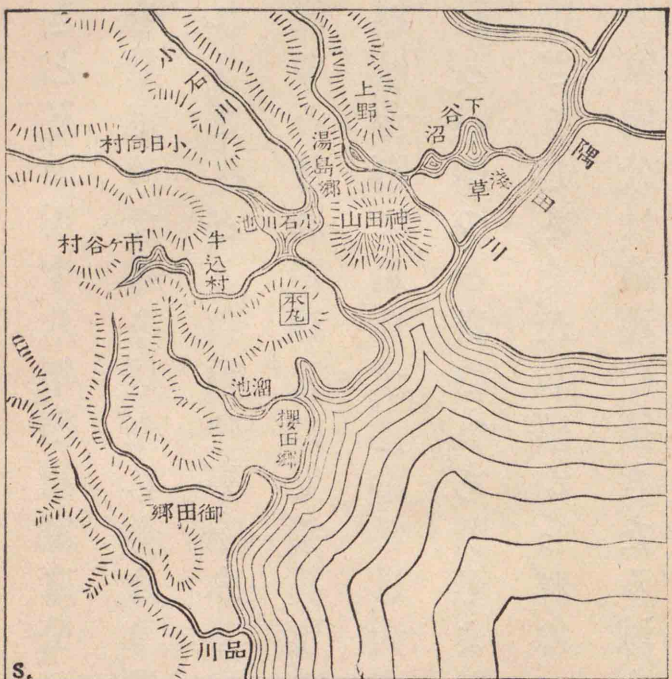
四、春興(本居豊穎)

きのふはひがし、けふは西、

うかれごころの、花ざかり、
 ゆめかうつゝか、飛ぶ蝶も、
 霞に酔ひてぞ、舞ひ遊ぶ。

五、江戸

江戸は、今は、東京とこそいへ、昔は、月影の、草より出
 てて、草にこそ入れ」と、歌へるばかり、廣く遙けき武藏
 野の末にして、町は、限もなく廣き野原に續き、東の入
 海は、廻りて、遠く、陸の間に入りこみたりしを、長き年
 月ふる間には、野も、かたはしより、田畠に開けしなる



家康開府當時の江戸圖

べく、海も、川水にわし流されたる沙に埋められて、洲
 は、陸に續き、淵は、
 島と變りつゝ、幾
 千度、そのさま、か
 はりつらむも、は
 かられず。
 江戸の城は、康
 正二年に、上杉定
 正の家老なりし、
 太田持資入道道灌の築けるなり。道灌の、この城つく

りたりし頃は、城のまぢかくまで、船漕ぎ寄すべかりきとぞ。天正十八年、徳川家康公、この地の便よきことを見定めて、移り居られしより、賑しきところとはなれり。されど、この頃の事を志るせる書に、城より東は、葭のみ茂れる潮入にして、諸士の第に、割り渡すべき地は、十町に足らず。かくては、大名の城下にはなるまじと、いひつる者さへありしよし、見えたれば、その開けざりしさま、わしはかられぬべし。

家康公は、道灌の築きたる城を、本丸とし、四方の石垣も、湟も、修めかへられて、大城となし、整へられき。さ

て、四方の海の波穩に、吹く風も、枝を鳴らさぬ御代となりにしより、出で入る人も、移り住む人も、年毎に、數まさるにつけて、神田山も崩され、下谷沼も埋められ、淺草は、隅田の川口より、程遠き川上となりて、今は、海苔の名に、古の形見を殘せるのみ。されば、貴人のきらびやかなる第のあたりは、狐狸の隠れたる叢の跡にして、商人のうるはしき家の下は、鯉鮒の潛みたる淵なりしを、さりともしる者なきばかり、うち開けたるは、いとめてたきことならずや。(佐野常民)

六、旅況の古今

嘉永年間、徳川氏に、將軍宣下の勅使として、京都より下されたりし、ある公卿の詠まれたる歌に、

君が代は、うまやうまやに、旅寢して、

くさのまくらも、知らで來にけり。

と、いふがあり。たもふに、わが國、近時の旅店は、衾襦より、飲食にいたるまで、一も闕くるところなきは、この和歌にて、あきらかならむ。この頃、肥後の竹添井井の棧雲峽兩日記として、支那にありし時、北京より、蜀に遊びたる、紀行の草稿を見しに、その長安に至りし條に

いはく、凡、禹域、客店、獨、儼、臥房、而無他具。故行旅者、必齎枕席衾襦、始得涉遠。北地又無廁竇、人皆矢於豚柵。豚常以矢爲食、瘦削露骨。有上柵者、輒來群於後、驅之不去。殆使人困。此地始有廁竇之設。不潔淨亦勝無矣」と、見たり。支那の旅況、これを、わが國の今日に比ぶれば、實に苦しいふべきなり。顧ふに、世の、いまだ、開けざりし時に當りては、いづれの國か、然らざらむ。

わが國も、往時は、これに類せしこと、多かり。日本武尊は、皇子なり。その尾張の國に留り給ひし日、劔を桑樹に懸けて、厠に上られたること、史に明なり。降りて、

徳川氏の始に至りても、將軍秀忠、夜、厠に上りて、刺客の麥隴中より來り窺ふを見きといへば、その狀も知られなむ。然れども、わが國、古より、矢を以て、田に糞ふ故に、家として、厠竇の設なきはなかりき。たゞ、飲食衾稠の不便にいたりては、全く、支那に異らざりしなり。番に、異らざりしのみにあらず、甚しきにいたりては、旅店だにあることなかりき。これ、その往時、旅を以て、草枕と稱せし所以なり。古歌にいはずや、

家にあれば、筥にもる飯を、くさ枕、

たびにしあれば、椎の葉にもる。

と。飲食も、また、これに準ず。故に、軍防令には、兵士をして、人毎に、糶六斗を儲へしむといひ、伊勢物語には、涙を、糶の上に落すといひ、太平記には、饘を進むといへり。皆、これ、支那の「適千里者、三月聚糧」といふと、その趣を同じくせり。

柳庵雜筆に、木曾の贄川驛の一旅店に残れる、慶長年間の宿帳といふものを、載せたり。

御糶、ほとぼし過し申さる様、念入れ申すべく候ふ。夜の物、御先觸に御書き入れなき分は、睨と、御受け合ひ申さず候ふ。

又、令條記に、寛永三年五月、將軍上洛の時、路次中、宿賃御定書といふものを載せたり。

人に四文、馬に八文。但し、自分、薪焼き候はゞ、人に二文、馬に四文。馬屋も、これなく、自分、薪焼き候はゞ、二文。馬屋は、これなくとも、亭主の薪に候はゞ、四文たるべし。京にては、馬屋、これなく、外に繋ぎ、自分の薪にて、四文の事。

それ、慶長より、寛永にいたるに、ねよびては、世も、また、漸く、開けて、その旅況も、往時と同じからざるべきを、行旅は、猶、糧を齎し、旅店を儼り、湯を請ひ、糲を食ひて、

寝るにとゞまり、いはゆる、木賃にて、償ふに、薪の價のみを以てせしなり。若し、旅客、自ら、糲を漬すを煩しく思ひ、これを、旅店に託すれば、その漬すこと、度を過さしめて、竊むものありしを以て、ほとばし過さずといふ語を、載せたるなり。

余、幼時、これを、故老に聞く。その言に曰く、昔は、諸國修行と稱する者、必ず、鍋と米とを齎し、至るところ、山野に露宿して、未だ、嘗て、逆旅に就かず。今、劇場にて、宮本武藏に扮する者、必ず、横ざまに、一包を負ふ。これ、その飯を炊ぎし鍋なり。昌平、日、久しくして、僅に、その遺

風を存するものひとり、世のいはゆる六十六部といふ者のみ」と。果して、聞く所のごとくならば、我が國も、また、二百年前の旅況、必ずしも、支那と異るところあらざりしならむ。(那珂通高)

七、高山彦九郎

高山彦九郎は、上野新田の人なり。余が、二十ばかりの時、來りて一宿せり。この人、鼻高く、目深く、口廣く、丈高くして、總髮なり。常に、勤王の志あつく、歴代天皇の御諱^{ミコナヒ}及び、山陵の如き、暗記して、一も誤らず。談、たまた

朝代

ま、王室の衰へしことに至れば、かならず、流涕^{ナミダ}せり。六十餘國を遊觀せむと、四方をうちめぐりしが、その間の奇事異行、すくなからず。

ある時、備前の閑谷^{イヌヤ}の學校に宿りて、その學制規約などを尋ねしに、教授の人、書物一冊を出して示したり。翌朝、はやく、その寢室に行きて見れば、彦九郎は、明くるも知らず、燈に對して、その書を寫し居たり。猶、半枚ばかり残れるを、やがて、寫し終へしが、すべて、五十葉ばかりの寫本なりきとなむ。

それより、播磨に赴き、姫路の北郊^{キタノハシ}なる、相識の人の

家に宿れり。あくる日の夕つ方、暇を乞ひて、出てむとするを、主人とて、めて、時は、節季なり、日は、くれか、れり、明朝、立たれよと、いひしに、これより、但馬に行き、年内に京へ出てて、内侍所の御神樂を拜聞せむと思へり。日數かぎりあればとて、ハレ志ひて、ケテ出でたちぬ。

さて、その翌春、かの北郊の百姓の罪ありて、獄に下されしものが、赦されて、歸り來れり。その者、獄中の事を語りし中に、同じ獄に、一人の山賊ありき。種々の話の末に、山賊をなして、深山に、夜を明したらむには、おそろしき獸などにもあひ、又、天狗などいふ者をも見

所ハハ

しならむと、問ひしに、賊の曰く、十餘年、山に棲みしも、別に、おそろしきものとは見ざりしが、たゞ、一度、これありき。去年某月某夜、某の山中にたゞみ、人を待ちしに、大なる男一人出で來るを見て、ミテわれら四人、キたちふさがりて、酒錢を乞ひしに、その人、大音にて、キ慮外者めと、叱りて、傍に人なきが如く、キ志づ志づとして、過ぎ行きしが、その聲の大きき、その眼の鋭き、これこそ、天狗などいふ者にもありつらめとぞ、いひしと、いふ。この事を、かの主人聞きて、月日を數へて、その時刻と、その土地とを考ふるに、その人は、必ず、彦九郎を

らむ。かの山中を、節季の夜半に、一人過ぐる人、外には、
よもあらじ」とて、舌を卷きたりとぞ。

また、彦九郎、江戸にありし時、新田のあたりに、百姓
一揆起りぬ。かくと聞くや、取るものも取りあへず、路
程二十里あまり、夜道をいとはず、馳せつきしが、一揆
は、既に、をさまりしかば、その夜、また、直に、江戸にかへ
れりとか。頼萬四郎、そのころ、江戸にありて、詳しく、そ
の事を知りて、この輩、亂世にあらば、一方に向ひて、必
ず、大功を立つべし」と、時々、語りて、歎稱せり。

さて、その地に偉人あれば、村吏などの悪むこと、い

づかたも、おなじことなるが、彦九郎が郷里は、ある旗
本の領地なり。その名主、年寄などいふ者、いかにいひ
いれしか、ある時、領主の邸へ呼ばれ、百姓にて、平生、長
き大小を横へ、家業をつとめず、書物のみ讀むは、不審
の者として、數月の間、門側の一室にわしこめられしが、
懇意の朋友、酒肴を携へ、訪ひ來るもの、虚日なし。ある
日、大府の一有司の邸に召されて、その方、何故に、諸國
を遊行し、名ある人を尋ね行くか、仔細ぞあらむ、一々、
申し上げよと、いはれければ、彦九郎、亂世には、武者修
行といふ事の候ふよし、承り候ふ。今、太平の御世に候

へば、諸國に、名ある人を搜し求めて、よき事を聞かむとするにて候ふ。そのよき事と申すも、忠孝の事より外にては、候はずと申しければ、さらば、この書を講釋せよと、論語を、一卷いだされけるに、彦九郎、いさゝかも、臆せず、辯舌ベツあざやかに、講說しけり。かくて、數日の後、又、かの有司の邸に召されて、講釋せしめられしが、そのをりには、次の間に、人ありて、その説を書きとめたりといふ。その後、又、數日ありて、召しいだされて、名字を名のり、大小を帶し、諸國を遊行する事、くるしからざる旨、達せられけり。

それより、年を経て、薩摩に遊びしが、歸途、久留米の某が家に宿りて、腹切りてうせぬ。人、その故を知らず。或人の話に、村吏の誣ウソひし事も、何の咎トガもなく、免されしは、某侯の當途の時なり。その後、かの侯、職を辭し給ひければ、その身も、便オモシなき事に思ひて、失せにけるにやと、いふ。されど、そは、命を棄つべきほどの事にもあらざれば、他に、なにか、深き仔細のありし事ならむ。猶、この人の事につき、聞き及びし事もあれど、今は、志るさず。(菅茶山著筆のすさび)

八、伊能忠敬

學術未だ開けず、器械甚だ疎悪なりし時代において、わが日本全國の海岸を測量し、地圖を大成して、國人を益せるのみならず、外國人をも驚歎せしめたる伊能忠敬の如きは、まことに、千古稀なる偉人といはざるべからず。

忠敬は、上總國武射郡小堤村なる神保某の子にして、十八歳の時、伊能長由の養子となれり。伊能氏は、下總國香取郡佐原村の豪家にして、世々、酒、醬油の醸造を業とせり。長由はやく、死して、家道やゝ衰へしが、忠

敬、儉素を務め、奢侈を禁じ、刻苦勉強して、遂に、よく、家産を恢復せり。

忠敬はやくより、曆學を好みけるが、年五十に及びたる時、その子に、家を譲りて、江戸に出で、専ら、曆學の研究に、心をひそめぬ。然るに、當時、曆法、精しからず。たまたま、高橋東岡の、西洋の曆法を傳ふるを聞き、これにつきて、學ぶ所ありしが、爾來、六年の間、晝夜をわかつたず、勉強したりければ、その學、大に進みたり。

寛政十二年、年五十六の時、幕府の命を受けて、蝦夷地を測量す。その後、また、東海道、及び、奥羽、北陸の沿海

を測量し、圖を作りて、幕府に上れり。幕府、その功を賞し、廩米を給して、小普請組となし、天文方に屬せしむ。後、また、山陰、山陽、西海、南海の沿海測量を命ぜられしが、その時も、また、圖を作りて、幕府に上れり。

測量をはじめてより、こゝに至るまで、實に、十有八年、全國の海岸、至らざる所なかりしが、その間、つぶさに、艱難を嘗め、身命を危くしたること、幾回なるかを知らず。嘗て、薩摩の諸島を測量せむと志ける時、風あらく、浪、甚だ、高かりしかば、船子等、船を出すことを欲せず。忠敬、大に怒りて、薩摩人は、大膽なりと聞きしに、

こは、何たる臆病ぞ。風浪、何ぞ、懼るゝに足らむ。速に、船出せ」といふに、船子等、やむなく、漕ぎ出し、が、風浪、いよいよ、あらく、船、覆らむとせしこと、五六回、辛くして、島地に達することを得たりといふ。

忠敬、晩年に、宇内沿海輿地全圖、及び、度数譜、行程記を集成して、幕府に上りしが、文政元年四月十三日、七十四歳にて歿せり。その著せる圖書數十部、中には、散佚せしものも少からざれど、その今日に遺れる地圖は、實に、末代までの重寶なり。

明治十六年、朝廷、その功を追賞して、正四位を贈ら

れしが、有志の士、また、相謀りて、紀功碑を、東京芝公園内に建てたり。嗚呼、忠敬の名は、萬世に亘りて朽ちざるべきなり。(那珂通世)

九、スエズ開鑿始末その一

スエズの開鑿は、佛國の學士レセップス氏が、多年の苦慮を費して、成功したる、希有の偉業なり。

そもそも、地中海と紅海とは、この百英里の地峽によりて、阻絶せられ、歐亞弗三洲の交易、これがために妨げられしこと、こゝに、幾千年なりしぞ。されば、いに

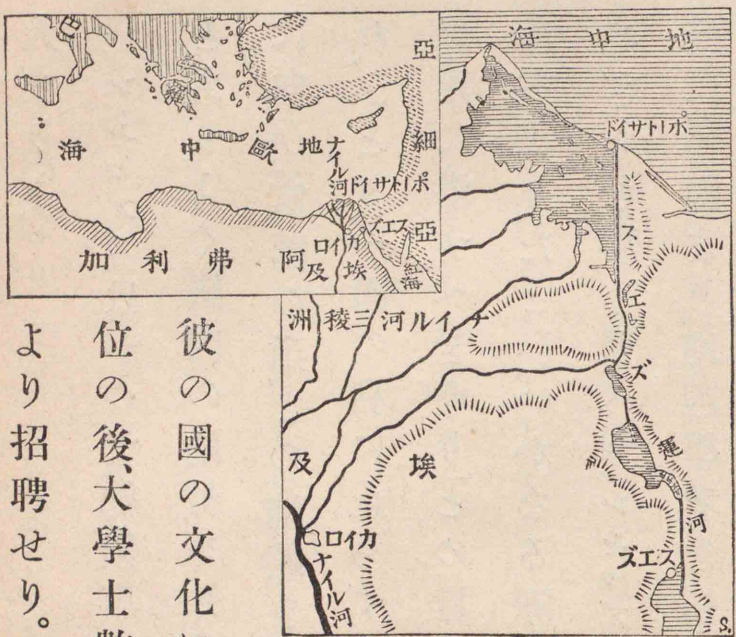
しへより、この障礙を除きて、交通の便を開かむことを謀りたるもの、その幾人なりしかを知らず。されど、遂に、成功の運に向ひたるものあることなし。

今を去る、凡そ、三千年前、埃及國の盛なるにあたり、嘗て、一の河道を開きて、漕舟を通せしことあり。西曆紀元前四百年代、希臘の、埃及を併有するに、たよび、その河道を修治したりき。その後、羅馬衰へ、亞刺比亞の回部の、埃及を侵取せしをり、又、河道修治の舉ありき。この數代の間に、開修せし河道は、時に従ひて、多少の變遷なきにあらざりしかど、大かた、ナイル河を溯り

て、紅海の西岸に出づるものにして、その距離、甚だ長く、かつ、その幅、狭きを以て、大船を出入せしむるに足らざりしなり。

十八世紀の末年、佛帝ナポレオン第一世の、埃及を征服せる時、この地峽を開鑿して、運河を通ぜむことを企て、地勢を測量せしめしに、兩海潮面の高低、その差、百メートルにして、開鑿するも、その効なかるべしとの議ありしかば、遂に、その企もやみぬ。

その後、埃及王アッリは、みづから、開鑿の事を企て、英佛兩國に向ひて、地理學に精通せる學者を、派遣せ



られむことを乞へり。佛國は、たゞちに、承諾せしかど、英國の異議ありて、議未だ、決せざるに、王は、中途にして崩せり。ついで、イスメール王立ちぬ。王は、佛國に遊學せしことありて、深く、彼の國の文化に感じ居たりければ、即位の後、大學士數人を、顧問として、佛國より招聘せり。レセップスは、實に、その一

人なりき。

レセップスは、かつて、總領事として、埃及にありしことあり。よく、國內の地勢を知り居しかば、去ば去ば、王に向ひ、富國の道、この地峽を開くより、よきはなし。これ、ひとり、一國の利に止らず、地球上の諸國、みな、その恩惠に浴すべきなり」との旨を、反覆せしかば、王、遂に、意を決し、たとひ、いかなる障碍ありとも、決して、中絶せざらむ事を盟へり。レセップス、感激、措くこと能はず、直に、佛國より、地理學者を招聘して、くはしく、測量せしめたるに、兩海の潮面、その高低、全く、相平均せるこ

とをたしかめたり。よりて、遙に、これを、佛國の公議に圖り、その助を假りて、この大業を大成せむとせり。たまたま、佛國の公議は、この事業の、ひとり、天然の困難あるのみにあらずして、更に、國際間の非常なる困難あるべきことを説きて、たやすく、この議に同せず。

一〇、スエズ開鑿始末 その二

レセップスは、本國の議、かくのごとくなるを聞き、奮然として起ち、遂に、一身を以て、事に當らむと、決心せり。まづ、單身、土耳其にゆき、諄々として、開鑿の、必ず、着

手せざるべからざるを説きて、その國議を定め、更に、英國に赴き、反覆陳論して、遂に、その承諾を得たり。それより、諸國を歴説して、懇に、その利害得失を辯じ、猜忌の心を釋きて、協同の心をひらきたるに、いづれも、皆贊同の意を表せり。こゝに、埃及國、その主となり、佛國、これを助け、他の諸國、また、これが捐金をなすなど、レセップスの志業は、漸く、その緒に就きぬ。

されど、諸種の困難は、開鑿の困難とともに、レセップスの一身に纏繞し來れり。その困難とはいかに。開鑿の業、着手せられてより數年、いまだ、その成功の端緒

をだに見ざれば、各國の物議は、囂然として起り、或は、その業の緩漫なるを謗り、或は、その業の不成功を議するもの、ひきもきらず。また、開鑿場にては、未開の地のならひ、器械の用意も、充分ならずして、百事、みな、意の如くなること能はず。ことに、一帯の地、茫々たる沙漠の原野にして、炎暑、まことに、焼くが如くなれば、場中二萬の役夫は、日夜、その厭苦を訴へてやまず。内外の攻撃は、かくのごとくにして、みな、レセップスの一身に集り、その心勞、實に、いふべからざる上に、志かも、第二の困難は起れり。そは、資金の缺乏なり。

レセップスは、この間に立ちて、すこしも、たわまず、いよいよ、勉強して、工事を督し、孜々として、業務をつとめたり。されど、各國誹謗の論は、ますます、その勢を得、誣罔、こもごも、起りて、また、いかにともすべからざるに至りしかば、遂に、各國に向ひて、實地を調査せむことを乞へり。各國の委員等、實地に臨みて、これを調査せしころには、土功は、や、その半を終へたりければ、流言も、これより、次第に、衰へ、資金も、從ひて、集り、遂に、その大成の功を見るに至れり。

はじめ、レセップスの、埃及王に建言せしより、歲月を

かぞふれば、實に、十有五年、その費用を算すれば、實に、八千萬弗の多きにのぼれり。その事業の大なること、想ひやるべく、レセップスの苦心のほど、また、仰ぐべきなり。(久米邦武著米歐回覽實記)

一一、ポルトサイドより友人に寄する書

先便、セイロンよりの拙書、さだめて、御落手のことと、存じ候ふ。爾來、船足恙なく、アデンを過ぎ、スエズを過ぎて、昨夜、ポルトサイドモントペに安着いたし候ふ。こゝは、御承知の如く、埃及の東北端にある一小市にて、地中

海の入口に候へば、身は、いままさに、歐亞弗三洲の境界の上に立てるにて候ふ。

多年、夢寐の間に往來せし、歐洲の地も、はや、指顧の間にせまりたれば、一行の人々、皆、勇みよろこびて、満船、何となう、氣も浮きたちて見ゆるを、不思議や、小生は、たゞ、限なき怨恨悲愁の思に、ひとり、胸をのみいため居り候ふ。

そは、はじめ、香港を過ぎて、清國衰弊の状を見しに起り、中頃、印度に入りて、その亡國の跡を吊ひしに養はれ、今、また、こゝに來て、埃及國の貧弱を哀むにより

て、全く、除くべからざる、心中の苦となりはてたるにて候ふ。

盛者必衰の習とはいひながら、はやく、五千年の昔にありて、その文化を、世界に誇りたりし國の、今は、ただ、その形骸をとめて、尖塔堂閣の美、纔に、行客の憐れを買ふに過ぎざるなど、いかにも、悽慘の事に候はずや。嗚呼、これ、國民の罪か、そもそも、天道の循環、また、いかにもすべからざる數か。これを思ひ、かれを思へば、まことに、感慨に堪へざる次第に候ふ。

わが船の、運河を過ぎしは、日、既に、三稜洲に落ちて、

夕月の影はや、沙上に、ほの見ゆる頃にて候ひき。月は白く、沙は赭く、近き丘のみ、黒く時つ中を、一隊の土人の、駱駝に跨りて、徘徊する様の奇なる、その寂寞荒寥の景、殆ど、形状すべからず。室に入りて、寢に就けば、玻璃窓、圓く、月光をやどし、婆娑たるその影、枕頭に往來して、終宵、眠ること能はず候ひき。

その翌日、ポートサイドに着き候ひしが、夕暮になりて、一葉の小舟、わが船の下に漕ぎ來れり。中には、一人の美人ありて、人々の投げ與ふる錢をば、傘にて受けとめ、胡弓に似たる樂器を彈き候ひき。さても、その

音の悲しき、泣くが如く、恨むるが如く、はては、訴ふるが如く、心なき人々すらも、そゞろに、征衣を濕し候ひき。小生は、はや、堪へかねて、いそぎ、船房に退き、ひとり、輾轉の思に、一夜をあかし候ひぬ。

運河の光景、レセプスの偉業、その他、志るすべきこと、少からねど、今は、筆とるに堪へず。なにも、後便に譲り候ふ。匆々。

一一一、舟路（落梅集）

海にして、ひゞく櫓の聲、

水をうつ、	れとのよきかな、
たほぞらに、	雲はたゞよひ、
潮わけて、	舟は行くなり。
志づかなる、	空にすかして、
波の色の、	あをきを見れば、
みなそこは、	はても知られず、
流れ藻の、	浮きつ沈みつ。
みどりなす、	草のかげより、
湧き出づる、	泉ならねど、
れのづから、	満ちくる汐は、

うなばらの、	うちに溢れぬ。
さながらに、	遠き白帆は、
むれをなす、	まき場の羊、
吹き送る、	風に飼はれて、
わだつみの、	野邊を行くらむ。
雲ゆけば、	舟も志たがひ、
舟ゆけば、	雲もまた追ふ、
空と水、	相合ふかた、
もろともに、	けふのとまりへ。

一三、 埃及

埃及にては、一年の間に、たゞ、二季の代序を算するのみ。ナイル河増水の季と、減水の季となり。わが國にては、春暖の氣、催しそめて、そこもこゝも、緑の色にそめなされ、うらゝかなる日影に、梅笑ひ、鶯囀る頃、かしこには、はや、日光の熱、堪へがたきほどなり。泉は、涸れて、水なく、空は、一面にすみて、雨雲の影見えず。住民は、往々にして、日射病にかゝり、又、おそろしき、ペストの禍にもかゝることあり。

かくて、太陽、その最高頂に達せし頃より、ナイルの

河水は、漸々、増水して、こゝに、二季のかはりめは來るなり。かの、今まで透明なりし水色は、いつか、緑赤色に變じ、水量、日を追うて増り、八月中には、遂に、河岸に溢れ出で、原野は、忽ち、變じて、大海となり、都府、村落は、無数の島嶼となりて、その中に浮び、山嶽丘陵の頂、椰子樹林の梢のみ、僅に、その間に點々たり。九月の終には、浸水の最頂點に達し、それより、又、漸次、減水す。その河水の増減は、毎年、規則正しく行はれて、少しも、變ずることなし。

減水の終りて後、幾くもなくして、埃及の世界は、そ

の美しき光景に移りゆくなり。百花芳草、争ひ開きて、木々の梢は、皆、新緑の衣を着け、ナイル河岸一帯の地は、恰も、一大樂園の如く、えならぬ香の、そよ吹く風に、さそはれ來るなど、その光景の美、風懷の幽、まことに、いふべからず。ことに、その空の色の美しきこと、他國にては、到底、見ること能はざるなり。

さまざまの穀物、めづらしき果實なども、皆、この季に、みのりはじめて、その豊麗を競へり。これ、ナイルの洪水によりて、地上にのこされたる粘土の、養分多きによるなり。されば、ナイル河の洪水は、恐るべきもの

の如くなるも、志かも、埃及にありては、缺くべからざる天恵なりとして、尊重せらるゝなり。

一四、植物の景觀と氣象との關係その一

植物の景觀と、自然の氣象との間には、自らなる關係ありて、互に、相依り、相助けて、以て、この宇宙の美を現出するなり。故に、晴、雨、曇、雲、風、霧、露、月等の、さまざまの氣象に對する、植物の景觀に注意すれば、まことに、れも志ろき趣あるものなり。

春の日は、霞たなびきて、曇りがちなるものなるが、

かゝる空合に、山櫻の咲き亂れたるは、まことに、趣深きものにして、その調和の美、いふべからず。今、かりに、この櫻花をして、澄みわたれる秋の空に開かしめば、いかなるべきか。たそらくは、優美艷麗なる、その特性は、その十が一をも現ずること能はざるべし。又、春の野の霞にこめられて、をち方の山々は、淡き紫色につつまれ、紫雲英、蒲公英などの、一面に咲きみだれたる中に、蝶、蜂などの、たとづれ來て、こゝちよげに、飛びくるへる光景は、よく、この頃の日よりの特徴をあらはせり。

萬緑の候となれば、快晴の日にも、空氣は、水分を含みて、何となう、夕立の雲、起り來べきかと思はるゝものなるが、その青き空に、綠滴らむばかりなる茂樹、叢竹の、枝さし交したるは、その配合、ことに、妙にして、人をして、そゞろに、夏の面影を忍ばしむ。やがて、秋晴の節となれば、空氣、清らかになりて、遠きあたりまで見やらるゝに、槭樹、公孫樹などの、紅葉したるが、その快晴の氣に照し出されたるなど、また、いひ難き趣あり。冬の末より、春の初にかけては、日中にて、寒さは、げしきに、その寒く晴れたる朝に、梅、蠟梅などの、いちは

やく、咲き出でたるは、心ちよきものなり。

曇の空には、さまざまあれど、春の花曇は、最も、趣ありて、よく、その特徴をあらはせり。又、今にも降り出さむかと思はるゝばかりなる、雨を含める空には、柳、杉、樅などの林は、最も、朧も朧ろく見ゆ。

雨の朧も朧ろきは、燕子花、花菖蒲、溪蓀などの咲き出づる、五月雨の頃なるべし。降るかとするれば晴れ、晴るゝかともへば、また、降り出でて、そのたびごとに、花の艶麗をまさしむるなど、人をして、一種の幽情を催さしむ。ことに、これらの植物の花弁と葉とは、自ら、

雨を防ぐやうに作られたるを以て、雨滴は、その上に、
小さい玉水となりてとゞまれるが、その美しさ、まことに、形容し得べくもあらず。

驟雨、雷雨などの、はげしき雨にも、また、朧のづからなる植物の配合はあるなり。そは、多く、雨志げき地に生育せる植物、又は、さる地より、移し植ゑられたる植物にして、彼の梧桐あまぎの如きは、その一例なり。その直立して、膚青き幹、その浅く切れ込みたる、廣き葉の、一は、新に洗はれて、一志ほ、鮮緑の色をまし、一は、ばらばらと音たてゝ、その葉末より、餘滴を志たゝらす光景は、

よく、この植物の、かゝる急雨に適せるを見るべし。

蓮の葉も、また、雨を受くるに適せるものなり。そは、葉の表に、一面に、天鷲絨のやうなる、こまかき突起ありて、その間に、空氣を含むをもて、雨に逢ふも、少しも、濡るゝことなればなり。かくて、又、その空氣は、よく、光線を反射するを以て、葉の上にとゞまれる玉水をして、一種銀色の光を放たしむ。芋の葉も、殆ど、これに等しき構造をなせり。

秋雨につきて、聯想せらるゝ植物は、少からざれど、先づ、人の心をひくは、芭蕉なるべきか。秋も、末になり

て、その葉の破れ、筋のあらはれて、見るからはかなげなるに、さびしき雨の、うちそゝぎたる、人をして、殆ど、蕭條の氣に堪へざらしめむとす。

松は、特に、雨に適せる植物にはあらねど、その雨に濡ひて、細き葉の、束ねたるやうになりて、少し、うつむきつゝ、雨滴を志たゝらすさまは、また、志めやかなる趣なきにあらず。

一五、植物の景觀と氣象との關係その二

雪は、寒國のものなれば、これに適するは、寒地の植

物なれど、暖地の植物も、また、これにあひて、たも志ろき景色を見するものあり。彼の常磐木の類、例へば、樅、杉、松などの類の、濃緑なる葉の、純白なる積雪の下よりあらはれたる、又、南天燭の赤き實の、その間に、ほの見えたる、共に、色彩の配合上、見棄て難き美觀なり。又、松の、その魁偉なる枝もて、竹の、その志なやかなる枝もて、積雪の重みに堪へたるさまは、一は、豪壯、一は、清楚の趣をあらはして、共に、賞すべし。

風の趣も、また、棄て難し。そよ吹く風の、草木をわたりて、やさしき樂を奏する、木がらしの、落葉を吹きま

きて、すさまじき音をたつる、共に、興なからずやは。ことに、野邊の芒、水邊の蘆の、秋風にそよげる趣は、秋の風物の、最も、あはれ深きものなるべし。また、秋の夕、澄みわたれる空に、一點の雲もなく、さしたる風のわたるとも見えぬに、木々の梢の、そよそよと、うちそよぐは、いひゑらぬあはれのこもるものなり。

松風、松籟などいへるも、これと同じ趣にて、風もなき空に、松の梢の、ひとり、美妙なる樂を奏し出づるは、まことに、何の音ぞと、あやしまるゝばかりなるが、これも、眼に見えぬ風の、見するあはれにして、古來、幾度

か、詩人の吟咏に上れり。

雲は、四時をわかず、をかしきものなり。春霞のたなびきて、花かと思紛ふ空合、夏草の茂きが上に崩れかかれる雲の峰、秋野の空に飛ぶ白雲、いづれも、皆、どりのあはれこもれり。又、彼の木曾、日光あたりの、樅、つが、落葉松などの、生ひ茂れる深林に、なかば薄雲のかゝりたるは、まことに、よく、幽邃の趣をあらはすものなり。

霧は、高原にたほきものなれど、平地、平原にも、また、全く、なきにはあらず。夏のころ、朝霧の立ちたる時、杉、

樅などの、黒き常磐木の、見えかくれするさま、田沼水などの、一面につゝまれたるさま、また、一種の風趣あり。

露は、夏草に下るものにて、朝、はやく、起き出でて、草むらの間を行けば、その葉ごとに、美しくして、恰も、白玉の如くなるを見む。ことに、稻、蘆などのやうなる禾本科の植物、又、欸冬などの葉の緑なる露は、規則正しくたけるを以て、その觀、頗る、美なり。

月は、季節によりて、その觀、一ならず。春の夜は、曇りがちにて、朧月、多し。世には、この朧月に、夜櫻を配して、

得がたき美景なりといふものもあれど、彼の朝日に
匂ふ山櫻の優美にして、壯快なるには、比すべくもあ
らず。夏の月は、これに反して、頗る、快濶なるものなり。
ことに、雨過ぎし木の葉、草の葉に映じたる月光は、い
ひがたき涼氣を催さしむ。中秋の満月は、空に洩えて、
光、まことに、異れるは、よく、人の知れるところなり。

月夜に配合せる植物は、あまり、多からず。彼の暗香
の浮動を賞すべしといひならはせる、梅なども、その
花の美觀は、なほ、晝間を以てまされりとす。されど、一
面よりいへば、とりいでて、これといふべき好配合の

なきは、たまたま、以て、行くとして、よからざるなき月
の美質を示せるものにして、松の月、柳の月、竹の月、梧
桐の月、皆、とりどりのあはれを具へざるはなく、さて
は、秋野の満月、夏山の曉月など、いづれも、他に求め難
き景致を具ふるにあらずや。(三好學著植物形態美觀による)

一六、わが小園

われに、二十坪の小園あり。園は、家の南にありて、上
野の杉を、垣の外にひかへたり。こゝは、場末にて、家、ま
ばらに、建てられたれば、青空は、園の外にひろがりて、

雲行き、鳥翔けるさまも、いとゆたかに、眺めらる。

はじめ、こゝに移りし頃は、僅に、竹藪を開きたる
あと、たぼしく、草も木もなき、はだかの園なりしを、
やがて、家主なる人の、小松三本植ゑて、やゝものめか
したるに、われも、隣の老媪の與へくれし、薔薇の苗を
植ゑそへて、四五輪の花に、吟興を鼓すること、多きや
うになりぬ。

一年、軍に従ひて、金州に渡りしが、その歸途、病を得
て、須磨に、故郷に、思はぬ日を費し、半年を経て、家に歸
り着きし時は、秋、まさに、暮れむとする頃なりき。園の

面、去年よりは、遙に、さびまさりて、白菊のひともとふ
たもと、ねぢくれて、咲き亂れたる、この景に對して、靜
に、きのふを想へば、萬感、そゞろに、胸にせまり、からき
命の助りて歸りし身の哀は、たゞ、このうれしさにけ
されて、たもはず、三逕就荒」と、口ずさむも、涙がちなり。
ありふれたるこの花、狭くるしきこの園が、かくまで、
人を感じしめむとは、嘗て、思ひよらざりき。

まして、それより後、病、いよいよ、つのりて、足立たず、
門を出づる能はざるに至りし今、小園は、わが天地に
して、草花は、わが唯一の詩料となりぬ。われをして、幾

何か獄窓に呻吟するにまさると思はしむるは、この十歩の地と、この數種の芳葩とあるがためにほかならず。

次の年、春暖漸く、催して、鳥の聲、いと、うらゝかに聞えしある日、病の窓を開きて、はし近く、にじり出でて、讀書に勞れたる目を遊するに、いきいきせる草木の生氣は、手のひらほどの中にも動きて、まだ、薄寒き風の、ひやひやと、病衣の隙を侵すも、いと、こゝちよく覺ゆ。これも、隣の老媪よりもらひし、絲菘の刈株、寸ばかり、緑をふいて、のびいてたる、秋の色も忍ばれて、うれ

し。かくて、ひる過ぎより、夕影、椎の樹に落つるまで、何を見るときもなく、酔うたるが如く、勞れたるが如く、うつとりとして、その日、一日をくらせり。(正岡常規)

一七、 武將の文事

太田持資は、上杉の家老なり。鷹狩に出でて、雨に逢ひ、百姓の家に入りて、蓑を貸し給へ」と、いひしに、わかき女、ものは、なにともしはで、山吹の花、一枝折りて、いだしければ、花をくれよと、いふにあらずとて、腹立ちて、歸りしに、これを聞きし人の、それは、

七重八重、花はさけども、山吹の、

みのひとつだに、なきぞかなしき。

といへる、古歌の心にて、衰なしと申す事を、いはで、知らせ申したるなり」といひければ、持資、驚きて、われ、かほどの事をだに知らず、百姓の娘にも劣れる事、口惜し」とて、それより、書をよみ、歌に、心をよせたり。

下總國へ軍を出す時、敵、山涯の海邊に、山上より石弓を張りたり。潮、湛ひたらば、通り難かるべし。いかに」といひしものありしが、折節、夜半なるに、持資、いざ、見て來む」とて、馬を乗りいだしけるが、そのまゝ、かへり、

「潮は干たり」とて、軍を、わし通しけり。これは、

遠くなり、近くなるみの、濱千鳥、

なく音に、志ほの、満干をぞ知る。

と、よめる歌あり。それを思ひいだして、千鳥の聲、遠く、聞えたれば、潮の干たるを知りたりとなり。また、暗夜に、利根川を渡す時、いづこか、淺瀬なるべき」と、口々にいひけるに、持資、古歌に、

そこひなき、淵やはさわぐ。山川の、

あさき瀬にこそ、あだ波はたて。

と、よめり。波の荒き處を渡せ」と、下知して、難なく、淺瀬

を渡りけりとなり。(湯淺元禎著常山紀談)

一八、國語と愛國心

國民が話す言語と、その國民の性質との間には、最も入り組みたる關係あるものにて、その國民が、一事物に對して、感じもし、考へもする、すべての事は、皆、その言語に反射し出づるなり。故に、言語は、その話す人の精神上に生活する思想、及び、感情が、外に出でて、化身したるものなりといふも、不可なきなり。

試に、支那語を見よ、いかに、仁義の道が、彼等の間に

行はれしかは、歴史をまたずして、言語の上に明なり。文人國に、詩歌の語、わほく、發達し、武人國に、武人の語、わほく、繁昌す。英語の、商業にわける、佛語の、社交にわける、獨逸語の、學問にわける、皆、それぞれ、その國民の長所によりて、發達したるものなり。

言語は、これを話す國民にとりては、恰も、その血液が、肉體上の同胞を示すが如く、精神上の同胞を示すものにして、これを、日本國語にてたとへていはゞ、日本人の精神的血液なりといひつべし。日本の國體は、この精神的血液にて、主として維持せられ、日本人

種は、この、最も、つよかるべく、最も、永く保存せらるべき、鎖のために、散亂せざるなり。故に、大難の一度來るや、この聲の響くかぎりは、四千萬の同胞は、いつにても、耳を傾くるなり。いづこまでも赴きて、飽くまでも、助くるなり。死ぬるまでも、つくすなり。忘却して、一朝、慶報に接する時は、千島のはても、臺灣のはしも、一齊に、君が八千代をうたひて、ことほぎまつるなり。

かくの如く、言語は、國體の標識となるのみにあらず、これと同時に、又、一種の教育者、所謂、なさけ深き母にてもあるなり。われわれが生るゝやがて、この母は、

われわれを、その膝の上に迎へ取り、懇に、この國民的、思考力と、この國民的、感動力とを教へ込みくるゝなり。されば、この母の慈悲は、誠に、天日の如し。苟も、この國に生れ、この國民たり、この國民の子孫たるもの、誰か、この光を仰がざらむ。

言語の上にはわれわれが心中に、一日も忘るゝ能はざる生活、ことに、人生の神代ともいひつべき、小兒のころの紀念が、結びつき居るものと、知るべし。われわれが、いとけなかりし頃、終日の遊につかれはてゝ、すやすやと、眠に就かむとせしをり、その母君は、いか

に、やさしき聲にて、ねよとの歌を謳ひ給ひしか。頑是なき小兒心に、わるふざけなどして、うち廻りし時、われわれの厳しき父君は、いかに、わごそかに、教訓を垂れ給ひしか。さては、鄰家の垣に攀ちて、餘念なく、栗の實を拾ひたる、或は、春のうらゝかなる野邊に、友だちと蓮華草などを摘みあるきたる、すべて、當時よりつかひ來れる言語は、當時の人名、當時の地名と共に、なにもいはれぬ快感を、われわれに與ふるなり。次には、小中學校のことば、次には、學生のことば、或は、市民としてのことば、或は、職業により、階級により、地方に

よりてのことば等、皆、それぞれの生活を、この上に反映す。故に、外國にて、人となりたるか、或は、外國人の學校にて、外國語の教育のみを受けたる人ならざるか、ぎりは、この言語に、感謝の意を表せざるものはなかるべし。

されば、國民が、その國語を尊ぶことは、一の美德にして、偉大なる國民は、必ず、その自國語を尊び、決して、これをわきて、他の外國語を尊奉せず、情の上より、自國語を愛し、理の上より、その保護改良に従事し、以て、眞正の國民を養成せむことをつとむ。現今の獨逸の

如きは、その一好例なり。

わよそ、いづれの國を問はず、苟も國家の觀念の上より、その一員たるに愧ぢざる人物養成を以て、目的とする以上は、常に、まづ、その國語を、尊ぶことをつとめざるべからず。志からずば、決して、その功を收むること能はざるべきなり。(上田萬年著國語のため)

一九、國語國文の變遷

中古漢文の、佛法と共に、わが國に入りきたりし時は、恰も、渴者の、水を得たるがごとく、非常の熱度をも

て、歓迎せられ、漢文をもて、公私一般の用文となし、律令格式より、歴史、風土記の編纂、裁判の宣告、官吏の請暇、その他、租税の帳簿、貸借の證文に至るまで、すべて、皆、不十分ながらも、漢文を用ゐしめたり。この時の人の思想には、その語源、語法をことにしたる漢文と國語とは、遂に、相合一すべからざることを思はざりしか、或は、また、漢文、漢語を用ゐて、わが固有の國語を撲滅せむとの企なりしか、今より、測り知るべからざれども、とにかく、一國の國民としては、一國の命運と共に、固有の國語を愛重すべきことを忘れてたりしがご

とし。固有の國語を撲滅するは、事情のゆるさざるところにして、當時實際のありさまは、漢文はひとり、博士、學士の間になこなはれ、僧侶になこなはれ、國民の一部になこなはれしにとゞまり、政事上の公文、たよび、政府編纂の歴史は、形式の美觀にとゞまりて、一般の國民にとりては、到底、その耳目に熟すべくもあらず、かへりて、文武離隔し、朝野蔽塞して、大政振はざる原因とはなりしなり。

かくのごとく、舉世、迷霧の中にありしも、幸に、豪傑の士ありて、音韻、たよび、假名の用法を發明し、これを、

通俗に用ゐ、また、和歌に用ゐ、國語と相密着して、自在に、使用するを得しめ、その後、また、一步を進めて、漢字まじりに活用し、國語を経とし、漢字を緯とし、國語を主とし、漢字を客として、さらに、一層の便利を感じしめたり。

かくて、假名は、一般に、便利を感じしめたるにかゝはらず、また、その使用法の、更に、一步を進めて、漢字まじりの物語體となり、いよいよ、便利を加へたるにかゝはらず、當時にありては、なほ、女文といはれて、朝廷の公文に用ゐられざりしのみならず、鎌倉の武力第

一の時にわいてすら、政府の記録、および、裁判申渡は、拙劣なる文章生、または、僧侶の手を假りて、鶴のごとき漢文を用ゐたりき。徳川氏にいたりては、いかに。林道春は、東照公の命を奉じて、信長譜、秀吉譜を編述せしに、なほ、漢文を用ゐたり。余が、最も、惜むところのものは、水戸義公の、大日本史を編纂せらるゝにあたり、三宅觀瀾のごときは、國文を用ゐむとの議を建てし、も、當時、多數の勢に制せられて、遂に、漢文を用ゐるに至りしことにして、氣運の、いまだ、至らざりしが、ためとはいへ、遺憾の事なり。おもふに、幕政三百年の間、文

人、輩出して、漢文の著述、すくなからざりしも、帆足萬里は、猿の狂言なる一語をもて、これを冷評したるに、あらずや。

もし、徳川氏のはじめに當りて、一の豪傑ありて、漢文の、遂に、國語と一致すべからざるを知りて、國文の體を一定し、公文に、歴史に、教育に、これを用ゐしめたらむには、その間に生れたる俊才の士は、青年の精神氣力を、佶倔艱難なる漢文の修業に用ゐずして、他の有用なる事業に用ゐる、三百年の文運は、駸々として、一層、高度の進歩に達したりしならむ。要するに、わが國

民が、國文、國語にねける固有の特性は、長き年月の間、一種の事情のために、發達を妨げられつゝ、經過したりしは、歴史の證明する事實なり。(井上毅著 梧陰存稿)

二〇、德川光圀

水戸中納言光圀卿は、賴房卿の第三の子、東照宮の御孫なり。寛永の十年、威公の嗣、いまだ定らざりしかば、大猷院殿の仰にて、中山備前守信吉、水戸に至り、光圀卿六つに成り給ひしを見て、かへりごとせしが、やがて、嗣に定りぬ。正保二年、史記の伯夷傳を讀みて、深

く、感ずるところあり。嗣は、兄賴重立ち給ふべき事なるに、かく、定りつれば、その子に、家を譲らむ志、この時より起させ給へり。

卿は、學問を好み給ふ志篤く、明曆三年より、大日本史を撰びはじめらる。神功皇后の本紀にありしを、后妃傳に入れ、大友皇子を、本紀に入れ、また、南朝を、正統と立てられしは、皆、この君の義烈なり。寛文三年、賴房卿、卒去あり。僧家の法を用ゐず、瑞龍山に葬り、威公と諡し、廟を、水戸の城中に建てられ、祭祀の儀式を定め給ふ。この時、殉死せむとする士ありしが、君自ら、その

家にゆきて、止めらる。この事、上に聞えて、殉死は、天下

一般停止の旨、

仰せ出さるゝ

にいたれり。

卿は、兄頼重

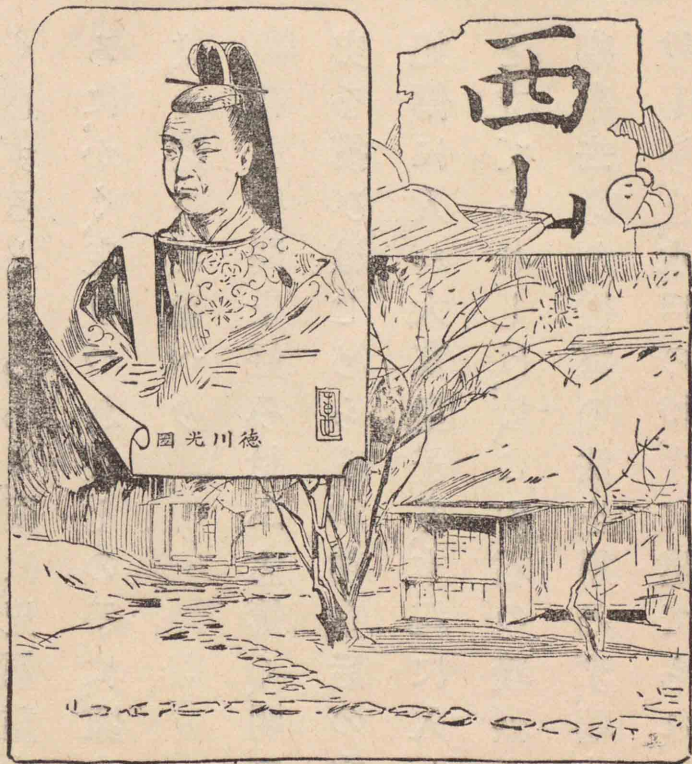
卿の子、松千代

綱方を、志ひて、

養嗣とせむ事

を乞はれたり。

この事、もし、聞



西山莊

き入れられずば、世を遯れむ志なりしに、頼重卿も、許諾ありしかば、卿は、松千代の弟、采女綱條をも引きとりて、養ひ給へり。さるほどに、綱方、病みて、卒去せられぬ。こゝに、又、綱條を世嗣になし給ひぬ。

延寶元年、孔子の堂を、水戸に建て給はむため、江戸駒込の屋敷に、假の設をなし給ひぬ。又、日本古來の假字の文章を編みて、三十卷となし給ひしが、このこと、天聽に達して、後西院天皇より、その書の名を、扶桑拾葉集と賜りぬ。又、彰考館を建て、和漢の群書を集められ、遠國他郷に學士を遣し、半紙一行の反古をも、見

るに隨ひ、拾ひ收め給ひけるほどに、色々の書ども、編集あり。中にも、禮儀類典五百卷は、まことに、我が國の寶典とも稱すべきものなり。又、明朝の遺民、朱之瑜といひて、文學ある者、清朝の粟を、食まじとて、日本に渡りしを、筑後柳川の文學、安東省庵、その俸祿の半を分ちて、養ひわきしが、卿は、これを召して、師となし給へり。かの攝津の湊川に、楠木正成の墓を修し、碑をたてらるゝや、面に、みづから、嗚呼忠臣楠子之墓と書かれしが、陰には、この人のえらびたる讚を、彫りつけられたり。

天和二年、朝鮮の使臣、江戸に來れり。然るに、その進物の目錄、禮儀を失ひたりしかば、卿、これを責めて、三條の質問ありしに、使臣、答ふることばなかりきとなり。又、後西院天皇の勅命により、鳳足といふ御硯の銘を作られしが、宸筆を下し給ひて、賞美せさせ給ふ。その御詞の中に、備武兼文絶代名士と、いへる御句ありしを、やがて印に彫らせられきとなり。

元祿三年、領國を、綱條卿にゆづり給ひ、權中納言に任ぜられたりしが、ほどなく、辭表を奉りて、常陸の久慈郡太田郷の西山に引き籠り給ふ。山莊のありさま、

萱をもて葺きたる家、蔦はひかゝれる門、それに竹が
き一重めぐらし、池には、蓮を植ゑ、山には、桃、數百株う
ゑ、川の流には、橋をかけて、桃源橋と名づけ、鹿をはな
ち、鶴をかはせ給ふ。瑞龍山に、壽藏を設け、衣冠を埋め、
みづから、碑陰の銘を作り給へり。元祿十三年、西山に
て、逝去あり。義公と諡せり。(湯淺元禎著常山紀談)

二一、文貞公

贈太政大臣藤原師賢公は、花山院内大臣師信公の
男にして、最も、學問に志あつくれば、はせしかば、後醍醐

天皇、殊に、寵遇し給ひ、正二位大納言に任ぜられたり。
元弘元年八月、主上、笠置に行幸し給へる時、叡山の衆
徒の心をはからむため、公、朝衣衰龍の御衣をたまはり、行
幸の體に擬して、この山にのぼり給ひしに、思ふに違
へる事情となりければ、夜半に忍びて、京へたもむか
せ給ふ。途中、志賀の浦を過ぎ給ひ、有明の月の、くまな
きを見給ひて、
スミマテヨクテラ

思ふ事、なくてぞ見まし。ほのぼのと、

ありあけの月の、志賀のうらなみ。

その後、笠置の行宮へまゐりて、供奉し給ひしに、皇

軍敗るゝに及びて、主上は、公と、藤房、具行の兩卿とを御供にて、風雨のはげしきに、嶮岨の山路をたどらせ給ひける時、暗夜にして、主上を見うしなひまゐらせしかば、はからずも、京へかへりて、所々に、忍び給ひけるほど、君を思ふ情に堪へず、

思ひかね、入りにし山を、たちいでて、

まよふりき世も、たゞ君のため。

遂に、とらはれとなり給ひて、翌二年五月、下總國に流さるべきに定りて、下りたまふ道すがら、をりにふれて、よまれたる歌ども、おほかる中に、

別るとも、なにか歎かむ。君すまで、

うきふる里と、なれるみやこを、

うみ山を見るそらもなし。わが心、

さながら君に、そへて來ぬれば、

など、よませ給ひたる、その悲憤慷慨の情、とりわきて、あはれにこそねほゆれ。

その年の十月、病にふし給ひ、二十九日に薨じ給ひき。歳三十二なり。翌年、主上、花洛（京都）に行幸ありて、公家一統の御代となりしかば、太政大臣を贈られ、かつ、文貞公と諡を賜ひて、その靈魂を慰め給ひき。思ふに、こは、

公の配所中に薨じ給へるを憐み給ふのみならず、記録に漏れたる忠績の遺事をほ、多かりけむによりてのことなるべし。

さて、公の薨後、四百餘年にして、配所の地及び墳墓等は、正しく、香取郡名古屋村の小御門なる事を發見し、その地の人心を協せて、社地を購ひ、神殿を造りつるが、朝廷よりは、特旨の賜金、また、靈璽の御劔を下し給ひて、遂に、明治五年、別格官幣社に列せられたり。あはれ、生きては、王事に勤勞せられ、死にては、國家の鎮護となられしなど、その功績のほど、なにかたとへ

む。小御門の神威、赫々として、世人の敬慕をうけ給ふも、げに、うべなることにこそ。(小中村清矩)

二二、 夢の跡

○

松尾芭蕉

夏くさや、つはものどもが、夢のあと。
やがて死ぬ、けしきは見え、ず、蟬の聲。

○

與謝蕪村

みじか夜や、なみうちぎはの、すて、篝。
かりぎぬの、そでのうら、這ふ、螢かな。

二三、螢

「螢は、景物の最上なるべし。水に飛びかひ、草にすだく。五月の闇は、たゞ、このものゝためにやとまでぞ覺ゆる」と、也有が、百蟲譜にかきたるも、げに、ことわりなり。その亂れ飛びては、この頃の、降りみ降らずみの空に、何の星かと疑はれ、草むらに宿りては、時ならぬに、何の花かと怪まるゝ奇觀は、まことに、比すべきものもなかるべし。されば、むかしより、いづこの國民も、皆、これを愛せり。

螢といへば、何人も、直に、火といふ聯想をひき起すべし。現に、我が國の「ほたる」といふことばは、火垂はたれ、又は、火照はてりといふ意より出でたるならむといへり。又、支那に、夜光、照夜、燃燐、宵燭、挾火、自照など、さまざまの異名あるをはじめとして、いづれの國の言語にても、螢といふ名は、皆、火に縁あるもののみなり。まことに、この火といふ聯想こそ、螢の命ともいふべきものにして、若し、これなかりしならば、恐らくは、その人の心を惹くこと、かくまでにはあらざりしをらむ。そは、同じ螢科に屬せる昆蟲類にて、その形、螢によく、似たるもの

の少からぬにもかゝはらず、その美しき光を缺けるために、動物學者以外の人には、少しも知られざるにても明なるべし。

さて、この螢をば、春の花、秋の紅葉の如く、一種の景物として、昔より、詩歌、文章に詠唱したる例の、ことに、東洋の國々に多きは、今更、いふまでもなきことなれど、更に、これを燈火にかへて、用ゐたる例も、彼の支那の、晉の車胤の故事を外にして、我が國にも、西洋の國にも、また、少からず。

北亞米利加なるメキシコの海岸にては、そのむか

し、海賊、横行して、去ば去ば、通行の船舶を劫し、かば、そのあたりを渡る舟人は、皆、恐をなして、海賊の眼にかゝらざらむことをつとめたり。されば、夜中の航行には、船中に、燈火を用ゐることを禁じ、その代用として、この地に産する、大なる螢を集め入れたる籠を、乗客に渡し置けりとぞ。かゝる例は、我が國の昔にもありて、これを忍びの提燈に用ゐたること、古き物語などに見えたり。又、ピートル、マーターといふ人の、亞米利加發見後三十年ばかりを経たる、彼の地の事を記せる、新世界といふ書には、その地の土人の、暗夜に深

林を行くに、大なる螢をば、わが足の拇指に縛りつけて、その進路を照すに用ゐ、やがて、螢の弱りきて、その光、薄くなる時は、更に、新しき螢と取りかへて、その光によりて、道をたどりゆくといふことを載せたり。

志かして、こは、ひとり、遠き昔の上のみにはあらで、現に、我が近江の守山、今宿地方にては、今日も、なほ、螢の光によりて、夜道をたどる習慣ありとのことなり。その地方は、總じて、螢多く、小川に添へる田圃道には、その岸の草むらに、數かぎりなき螢の集れるよしなるが、杖をもて、つと、草むらを打つ時は、螢は、そこに、強

き光を放つをもて、いかなる暗の夜にても、明に、その前途を見分くることを得といふ。されば、この邊の人は、提燈を携ふるかはりに、一本の杖を携ふるを常とせりとか。

又、キ、イバ島の邊にては、螢を絲につなぎて、婦人の胸飾、又は、髮飾となせり。この邊の螢は、その大さ、一寸餘もありて、その光、強ければ、その飾は、恰も、夜光の珠もて飾れるが如くにして、その美しさ、いふべくもあらずとぞ。又、ベーコンといふ學者の書ける、古き博物書には、小兒等の、螢をば、透明なる瓶中に入れて、これ

を川中に沈め、その光に寄りくる魚類を捕へたる話を載せたり。

又、ある畫家は、螢を畫かむ爲に、その螢の光を借りたりといひ、近き頃、佛國にては、その光によりて、寫眞をうつし、學者ありといへり。我が國にても、ある地方にては、養蠶の期節に、螢を籠に入れて、蠶室に備へ置きて、夜間、鼠の襲ひ來るを防ぐといふ。

かくの如く、螢の光を、燈火に代用する事は、各國ともに、昔より行はれたることにして、たもふに、未だ、燈火の發明なかりし、草昧の時代にわいては、その需用、

頗る、廣かりしものならむ。されば、余は、彼の車胤の故事は、虚名を好む支那人の作り話をらむといふ、ある學者の説には、容易に、従ふこと能はざるなり。(渡瀬庄三郎著螢の話による)

二四、鹽原

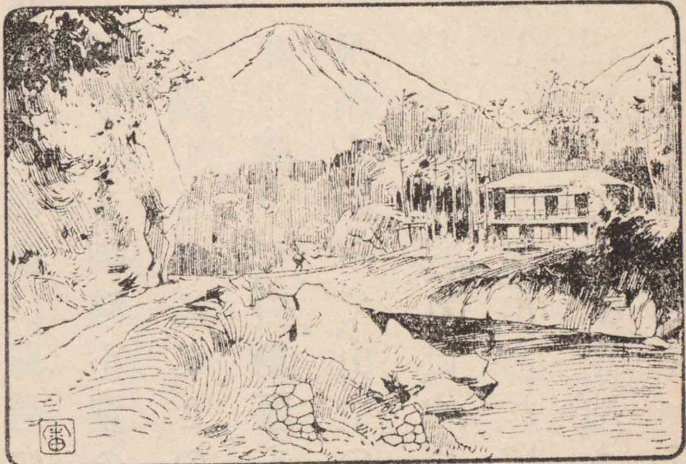
車は馳せ、景は移り、境は轉じ、客は改れど、われは、やすからざる悒鬱を抱きて、やる方なき五時間のひとりに倦みつかれつゝ、はじめて、西那須野の驛に下車せり。直に、西北に向ひて、今、なほ、茫々たる、古の那須野

原に入れば、天は濶く、地は遐に、たゞ平蕪迷ひ、斷雲飛ぶのみにして、三里の坦途、一帶の重巒、鹽原は、そこぞと見えて、行くほどに、路は窮らず。漸く、千本松を過ぎ、進みて、關谷村にいたれば、人家のつくるところに、涼涼の響ありて、これにかゝれるを、入勝橋となす。

橋を渡りて、僅に行けば、日光暗く、山厚く、疊み、嵐氣冷に、壑深く陥りて、いくめぐりせる葛折の、後には、密樹、鳥聲々に呼び、前には、幽草、花、歩々にひらき、愈登れば、遙に、木がくれの音のみ聞えし、流の水は、浅くあらはれて、すはや、こゝに、空山の雷、白光を放ちて、くづ

れ落ちたりと、すさまじかり。道の右は、山を剉りて、長壁となし、石、幽に、蘚、碧にして、幾條ともなく、白絲を亂し懸けたる細瀧、小瀧の、珊々として、灑げるは、嶺上の松の調も、さだめて、この緒よりやと、見捨て難し。

車を驅りて、白羽阪を踰えてより、回顧橋に、三十尺の飛瀑をふみて、山中の景は、はじめて、奇なり。これより行きて、道あれば、水あり。水あれば、必ず、橋あり。全徑にして、三十橋。山あれば、巖あり。巖あれば、必ず、瀑あり。全嶺にして、七十瀑。地あれば、泉あり。泉あれば、必ず、熱あり。全村にして、四十五湯。なほ、數ふれば、十二勝、十六



鹽原の景

名所七不思議、一々探り得べくもあらず。

そもそも、鹽原の地形たる、鹽谷郡の南より、群峯の間を分けて、深く、西北に入り、綿々として、箒川の流に、浜る片そばの、四里に岐れ、十一里に亘りて、いたる處、巉巖の、水を夾まざるなき

は、宛然、青銅の藥研に、瑠璃末を碎くに似たり。先づ、大

網の湯を過ぐれば、根本山、魚止瀧、兒が淵、左鞞の嶮は古りて、白雲洞は朗に、布瀧、龍が鼻、材木石、五色石、船岩など、眺め行けば、鳥居戸、前山の翠衣に染みて、福渡戸の里に入るなり。それより、途すがら、崖の處々に、咲き残りたる躑躅、山藤など、うちながめて、車をいそがするほどに、鹽釜の湯、甘湯澤、小太郎が淵など、夢のやうに過ぎて、いつか、畑下戸の里につきぬ。

一村十二戸、温泉は、五箇處に涌きて、五軒の宿あり。こゝに、清琴樓と呼べるは、南に方りて、箒川のゆるくめぐる積に臨み、俯しては、水石の、繚々たるを弄び、仰

げば、西は、富士、喜十六の翠巒と對して、清風、座に満ち、袖の澤を落ちくる流は、二十丈の絶壁に懸りて、素練を垂れたる如き吉井瀧あり。東北は、山また山を重ねて、琅玕の玉簾深く、一望の下、丘壑の富を擅にし、林泉の奢を窮めらるゝなど、又、あるまじき別境なり。

われは、この、繪を看る如き、清穩の風景にあひて、かの途上、峻しき巖と、峻しき流とのために、幾度か、魂飛び、肉消して、理むる方なく、かき亂されし胸の内は、靄然として、頓に、和ぎ、恍然として、總て、忘れたり。

まことに、よくこそ、われは來つれ。何ぞ、來る事の、甚

だ、遅かりし。山の麗しといふも、壤の堆きものゝみ。川の暢けしといふも、水の逝くに過ぎざるのみ。牢として、抜くべからざる、わが半生の痼疾は、いかで、壤と水との醫すべきものならむと、齒牙にもかけず、悔りたりしれのれこそ、先づ、悔らるべき愚のものなれや。

見よ、見よ、木々の緑も、浮べる雲も、秀づる嶺も、流るる溪も、峙つ巖も、吹き來る風も、日の光も、鶏の啼く音も、空の色も、みな、わのづから、浮世のものならで、われは、こゝに、憂を忘れ、悲を忘れ、苦を忘れ、勞を忘れて、身は、かの雲と軽く、心は、この水と淡し。希くは、今より、か

くの如くにして、わが生を終へむかな。

思もあらず、怨もあらず、金錢もあらず、權勢もあらず、名譽もあらず、野心もあらず、榮達もあらず、墮落もあらず、競争もあらず、執着もあらず、得意もあらず、失望もあらず、たゞ、天然の無垢にして、形骸の安きのみなるこの里、わが思を埋むる里か。わが骨を埋むる里か。(尾崎徳太郎)

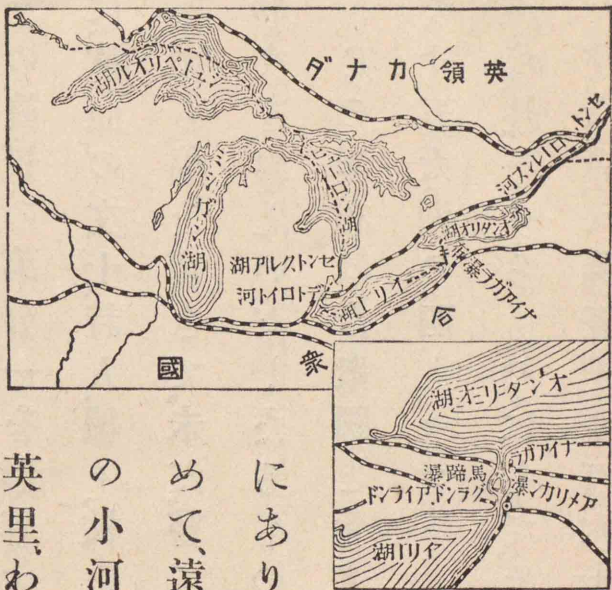
一一五、 ナイアガラ瀑布の記

ナイアガラ瀑布は、世界中の、最も、大なる瀑布にし

て、雄偉壯快、遙に、人の意表に出で、白虹飛龍の比喻も、その、眞景の萬分一を形容すること能はざるなり。故に、歐亞の文士、詩人、續々、杖を、こゝに曳けども、みな、筆を抛ち、稿を裂きて、未だ、嘗て、人口に膾炙すべき佳句、妙文を、寫し、いだしたるものなしとぞ。

この瀑布は、合衆國と北米英領との疆界の一分をなす五大湖の四と、セントクレア湖との水の流れ來て、注下するものにして、その五湖の面積を合計すれば、概算、八萬五千九百六十方英里の廣さに達せり。我が日本本島の面積より小なること、僅に、一萬四千

方英里なるのみ。そのシーパーリオル湖は、面積二萬八千六百方英里にして、世界中最も大なるものなり。五十の川流、これに注ぎ、位置最も西にありて、瀑布を距ること、きはめて、遠し。次は、ミシガン湖、無数の小河を容れ、面積二萬一千方英里、わが北海道より大なること、一千方英里なり。次は、ヒューロン湖、面積一萬九千方



英里、わが九州より大なること、三千方英里にして、湖中の島嶼、その數實に、三萬二千あり。次は、セントクレア湖なり。これは、上の三湖にくらぶれば、きはめて、小にして、面積、纔に、三百六十方英里にすぎざれど、たもしろき島嶼、たほく、名ある川河の、これにそゞぐもの、數を知らず。この水、下りて、イリノイ湖となる。面積一萬二千方英里にして、わが四國より大なること、二千方英里なり。デトロイト河、これにそゞぐ。この湖の東端、ナイアガラ邑の近傍にいたりて、グラント、マイラントと稱ふる。一島に遮られ、わかれて、兩派となる。瀑

布に近づく前は、河幅せまく、地勢傾きて、流も急なるが、忽ち、地勢の甚しき高低にあひて、直下するもの、これ、この瀑布なり。瀑布より下、十四英里にして、五大湖の一なるオンタリオ湖に入り、終に、出でて、セント、ローレンスとなり、大西洋に注ぐ。

さて、瀑布の左にあるものは、彎曲して、その状、馬蹄に似たれば、馬蹄瀑の名あり。右にあるものは、アメリカン瀑といふ。蓋し、その合衆國の境内にあるがためならむ。左瀑は、幅、二百碼にして、高さ、百五十呎、右瀑は、幅、二百碼にして、高さ、百六十四呎なり。算家の言によ

れば、兩瀑、注下の水量、一分時間に、一億噸のれほきにいたるとかや。故に、その響、萬雷の吼ゆるがごとく、大地も、これがために震動し、近傍數百歩の地にある家屋にては、盤水、常に、波紋を生ずといふ。

余が、こゝに遊びしは、六月の下旬なりき。氷柱の相集りて、玉山銀臺を造るが如き、絶景を見る能はざるも、晝は、飛沫の中に、虹霓の、七彩をあらはすを見、夜は、圓月の、朦朧として、瀑上へのぼるを見たり。ことに、余が宿れる絶景館は、馬蹄瀑の近傍にして、兩瀑の全景を專にせり。一たび、樓上の硝窓を開けば、飛沫、忽ち、衣

を濡し、涼氣、膚を侵して、更に、時季の夏なるを覺えざるなり。樓を下れば、兩岸、絶景の地に、邑民、あるは、飛橋を架し、あるは、螺階を設けて、人々の眺望に備へたり。余も、また、この螺階を下りて、斷岸の底にいたり、仰ぎて、大瀑の注下するを見しに、足ふるひ、魂れどろきて、心に感ずる所あるも、口、これをいふこと能はざりき。ともかく、この瀑布の雄偉壯快は、余の如き拙筆の、よく、志るし得べきところにあらず。かの漢土にて詩仙といはれし、李太白をして、この瀑布をのぞましめば、「疑是銀河落九天」の句は、廬山に發せずして、必ずや、こ

こに、發せしならむ。(小幡篤次郎)

一一六、英國人の探檢思想

近き世の世界探檢の事業は、多く、英國人の手によりて成功せられたるが、こは、まことに、英國人の特性ともいふべきものにして、その日常の行爲につきて、も、よく、その一端を窺ふことを得らるゝなり。例へば、かの海洋に航して、浩蕩たる波浪を凌ぎ、名山峻嶺に登りて、嵯峨たる巖壁を攀づるが如きは、彼等の、最も、好む所にして、彼等は、これによりて、その身體の健全

を圖らむことをつとむるのみならず、また、これによりて、各種の研究視察をなして、以て、その見聞を博くせむことをつとむ。志かして、それは、また、間接に、英國人をして、その敢爲勇邁の氣質を修養せしめ、併せて、又各種の困難に堪へ得べき素因をなさしむるなり。

余は、先年、歐洲漫遊の途次、瑞西のアルプス山麓なる一邑の旅館に投ぜしことあり。その地は、海面を抜くこと、數千尺の高地にして、千山、たかく、雲際に聳え、あたりは、すべて、氷山を以て包まれたる殊境なるが故に、他の外國人は、皆、その危険を恐れて、誰ひとり、登

山する人もなかりしが、ひとり、英國人のみは、男も女も、皆、平然として、盛に、登山せり。これを旅館の主人に問へば、英國人は、他國人に比して、登山するもの多きかはりに、その危険に遭遇して、死亡するものも、また、頗る、多しと、いへり。かくの如く、極めて、危険なる前例を示されたるにもかゝらず、かく、盛に、登山するは、以て、英人の敢爲勇邁にして、よく、探檢の思想に富めることを知るべきなり。

我が國に滞在せる英人某嬢、嘗て、人に語りて曰く、
「貴國の女子は、我が本國の女子に比して、その體質の

發達、頗る劣れるが如し。こは、まことに、人生の進歩に、多大の關係を有するものにして、決して、等閑に附し置くべき問題にあらず。然るに、わらはの見る所によれば、貴國にては、その發達をはかる方法、攻究し居られずして、これを實行する場所、及び、機會のあるにもかゝらず、遂に、これを行ふことをせられざるが如し。見よ、貴國には、富士山をはじめとして、形勝の山嶽、到る處に多きにあらずや。これ、まことに、その適當なる場所にあらずして何ぞ。わらはは、先づ、貴國の女子に向ひて、盛に、その登山の氣風を養成せむことを勸

めむとす。庶幾は、以て、この缺點を補ふことを得むかと。この一語、以て、英國の婦人の、その男子と共に、その探檢思想に富みて、敢爲の氣象を具へたるを見るべきなり。

又、先年、余が、米國より歸航のをり、英國の二少年と同船せしことあり。ともに、年齢十六七歳ばかりにて、まさに、中學校を卒業して、これより、商船學校に入學せむとするものなりしが、その準備として、先づ、一年の間、世界の各國に遊び、太洋の航路の模様、船内の裝置よりはじめて、港々の狀況に至るまで、詳しく、これ

を實地に學ばむとするなりとぞ。その志行の遠大にして、勇邁なる實に、歎賞すべきにあらずや。

余は、以上の數例によりて、英國の、今日を致せるもの、決して、偶然にあらざるを知れり。こゝに、余は、我が國人にも、大に、この氣風を養成せむことを望みて、やまざるなり。(濱尾新)

二七、亞米利加發見その一

クリストハー、コロンブスは、ジノバの漁夫の子なりき。幼時より、魁偉にして、その敢爲の氣象は、はかな

き遊戯のうちにもあらはれたりとか。稍、長せし頃、たまたま、その國人と、フニシア人との間に、争亂起り、本國の艦隊、續々、出征せしかば、彼は、みづから、乞うて、從軍せり。はげしき砲戰の後、彼の乘れりし艦は、敵の砲火のために、あはや、沈没の不幸を見むとするにいたりしが、大膽なる彼は、忽ち、身を挺して、激浪の中に投じ、遂に、よく、海岸に達して、その名を、國民の間に、あらはせり。

當時、新世界發見の理想は、全歐洲の人心を支配して、人々、みな、あらぬ空想の夢に耽れり。コロンブスも、

また、この夢ごこちに驅られて、深く、新世界發見の望を、わが胸中にきざみ、やがて、郷關をあとにして、葡萄牙に赴きぬ。こは、葡萄牙の海運、當時、世界第一と稱せられて、航海者の精銳、みな、この國に集りたればなり。首府リスボンにて、ある有名なる航海者の一女と結婚せしが、その家には、精細なる地圖もあり、精巧なる器械もありければ、彼は、寢食を忘れて、ひたすら、その研究に従事せり。

かゝる間に、一種の信念は、その心中に起りぬ。そは、印度に至るべき航路の、亞非利加を迂回せむよりは、

遙に、近き道あるべしとの信念なり。初は、たゞ、雲の如く、烟の如く、たぼろげに、その胸中に浮びたりしが、かく、思ひさだむとともに、種々の材料あらはれ來て、益彼の信念をたしかめたり。ある航海者は、二回まで、めづらしき彫刻ある木の、流れ來れるを見たりといひ、また、ある人は、皮膚骨格の、歐洲人とは異なる死屍の、西より流れ來て、アゾレスの港の方へ漂ひ行きしを見たりといへり。そを聞くまゝに、彼は、新航路の發見をなし、遂げむとの念、燃ゆるが如く、今は、まことに、抑へむとするも、抑ふること能はずなりぬ。されど、資力

なき一私人の、到底、企て及ぶべき事ならねば、いかにもして、政府の助を得むものと、彼は、輾轉反側の間に、うらめしき月日を送れり。

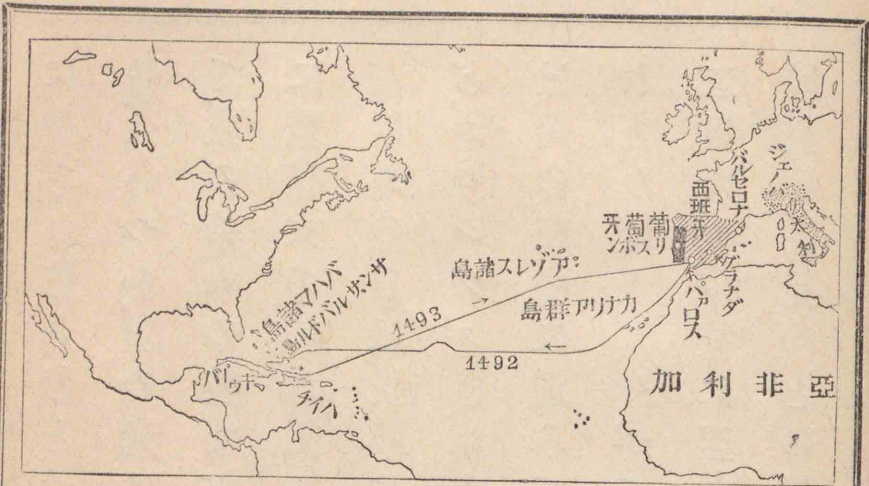
コロンブスは、遂に、意を決して、葡萄牙王ジョン第二世に、謁を乞ひ、まのあたり、熱心に、わが企圖を聞えまつりぬ。王は、心の中に、その説を信じ給ひしかど、陽には、少しも、感ぜぬさまを装ひて、空しく、その願を斥け給ひ、潜に、わが臣下に命じて、數隻の船を艤して、西方へ向はしめ給へり。されど、それらの船は、いくほどもなく、かへり來て、その望のあだなりしことを、復命

せり。

コロンブス、これを漏れ聞きて、深く、葡王の信なきを恨み、去りて、西班牙にゆき、國王フェルデナンド、及び、皇后イサベラの兩主に謁して、その企をきこえ上げぬ。彼のことばは、容易に、國王の心を動すこと能はで、彼は、こゝに、八年の、長き苦しき生活を送れり。あらゆる辛酸を嘗めつくして、なほも、撓まぬ彼の決心は、遂に、國王の心を惹きたらむ、グラナダ征戰の終りし後、イサベラ皇后は、彼に、三隻の小艦を與へて、萬般の用意をなさしめ給ひぬ。

二八、亞米利加發見その二

一千四百九十二年八月三日、コロンブスは、三隻の小艦と、百二十人の部下とをひきゐて、バ羅斯の港より船出して、カナリア群島に寄港し、こゝにて、飲水を蓄へ、勇み進みて、はてなき航海の程に上れり。一望きはみなき海面の水と空との界に、たほつかなくも、月日の過ぎ行くまゝにはやくも、不平の聲は、水夫の間に起りぬ。始のほどこそ、いかにもして、慰めたれ、終には、望郷の念に、え堪へぬ人々の恨、彼の一身に集れり。



彼は、巧に、これを慰めすかして、そを勵したれど、諸種のおやしき現象、つぎつぎに、起りきて、益水夫どもの勇氣を奪ひぬ。はてなき海草、波の上を埋めて、牧場かとあやしまるゝばかりなるに、はては、船足鈍りて、進むこと能はず。人々は、いかになりゆくにかと、安き心もなく、嗚呼、われらは、このれそろしき藻屑の中

に葬られ終らむとすと、うちかこつものさへあり。されど、いつか、望の光は、見えそめぬ。海は、漸く、淺くなりて、蘆の葉、木の枝など、そこゝに浮び、陸鳥の、檣の上に飛び來て、群れ戯るゝを見るにいたりぬ。

けふの日は、沈みぬ。なほ、何物も、眼には入らず。されど、コロンブスは、水夫に命じて、帆を卷かしめたり。こは、船の、夜中に進みて、暗礁に乗り上げむことをわそれたればなり。やがて、夜は、あけはなれぬ。これ、十月十二日なり。午後に至りて、陸は、天の一方に見えそめぬ。「陸見ゆ、陸見ゆ」との聲は、不意に、檣樓より、響き渡れり。

やがて、一發の砲聲は、水天に轟きぬ。後れたる他の二隻の船に向ひて、この發見を報ぜしなり。いつか、また、日もくれぬ。人々、船房に集りて、明日の日を待ち詫ぶるに、喜極りて、眠られず。さるほどに、東天は、やくも、白みそめぬ。鮮なる日輪は、のぼりぬ。綠滴らむばかりなる島は、旭の光に輝きつゝ、人々の目前に横りぬ。全艦、殆ど、狂せむと志たりしが、やがて、いさましき樂隊の唱歌は、起れり。國を出でてより、實に、七十一日、その辛苦、また、いかなりけむ。

左手に、旗を取り、右手に、劔を提げて、コロンブスは、

先づ第一に、上陸せり。岸には、一群の蠻民、集り居しが、驚のあまり、ことばなくて、佇立せり。げに、彼等の驚きしも、無理ならじ。かゝる人、かゝる船、彼等の、夢にだに、想ひ見ざりしところなるべければなり。彼等は、たゞ、天上の神達の下り來ましたるにやと思へり。さて、その蠻人のさまを見るに、身には、まとふべき衣なく、色は、飽くまで黒く、鼻と耳には、黄金の光まばゆきばかりなるを、さしはさみたるさま、異様といはむにも、ことば足らず。かくて、島の名も、さだかならねば、コロンブスは、新に、その名をば、サンサルバドルとつけぬ。

助の島といふ義なりとぞ。こは、これ、現代のバハマ島の一部分なり。人々は、ガラス、珊瑚の類を、蠻人に與へしに、彼等は、多額の金をさゝげて、敬意を表せり。

かくて、この月の二十七日には、キューバ島を發見し、ついで、十一月三日には、ハイチ島をも發見せり。いたるところ、綠林茂草、蕝鬱として、その地味、また、膏腴なり。一行は、また、こゝにて、喫烟の習慣を發見せり。この習慣は、こゝより傳りて、全世界にひろまれるにて、この土人は、これと呼びて、タバコスといへりしより、タバコの名は、起れりとかや。

二九、亞米利加發見その三

今や、コロンブスは、歸心、矢の如し。歸りて、國王に、この發見を報告せむとの念は、日一日と長じ來ぬ。かつ、彼の伴ひし船の、一隻は、破れ、一隻は、また、行方も知らずなりしかば、かばかりの小勢にて、この上の發見をつゞけむこと、難かるべしと思ひぬ。こゝに、彼は、その破れたる船の材をもて、一小砦を築き、その守備として、三十六人の水夫を残し、一千四百九十三年一月四日をもて、遂に、歸航の程に上れり。

歸途、海上、風浪、志きりに、荒れて、船の沈没せむとせしこと、幾たびなりしかを知らず。その、最も、烈しかりし折は、コロンブスも、はや、覺悟せしが、たゞ、この發見の、世に知られて、やまむは、いかにも口惜しとて、羊皮の上に、事の由をかきつけ、堅く、箱の中に密閉して、これを、海中に投じ、その、いつこかの海岸に、漂着せむことを祈れり。されど、風浪、いつか静り、船足、恙なく、三月十五日をもて、パアロスの港に、安着せり。

祝砲は、かなたの砲臺より、響きはじめぬ。寺々の鐘の聲、群集、歡呼の聲、互に、相和して、暫時、やまらず。コロン

ブスは、靜に、上陸して、直に、バルセロナの王宮に向ひぬ。その後には、新世界より齎し歸れる、さまさまの寶を積み重ねたる車、あまた従へり。そを見むとて、寄りくる市民のとよみは、いかに。恐らくは、將軍凱旋の式も、これには、過ぎじと思はれたり。國王は、親しく、彼を玉座に引接し給ひて、忝なき賞讚の言葉をかけ給ひしが、これより、彼の盛名は、冲天の勢をもて、西班牙全國に響き渡り、はては、歐洲全土に響き渡れり。

訂正中等國語讀本卷五 終

明治三十六年十一月廿四日訂正廿六版印刷
 明治三十六年十一月廿七日訂正廿六版發行

全十一冊

定價	十一ヨリ各貳拾六錢
附錄	三拾錢

明治三十六年十一月廿四日訂正廿六版印刷
 濟定檢省部文用校學中



著者 落合直文
東京市本郷區駒込淺嘉町七十八番地

發行者 三樹一平
東京市神田區錦町一丁目十番地

印刷者 新井豊造
東京市神田區錦町三丁目二十五番地

印刷所 明治印刷所
東京市神田區錦町三丁目二十五番地

發行所 關西專賣

東京市神田區錦町一丁目
(特電話本局二四三八番)
 大阪市東區船場後町四丁目
(特電話東四三番)

明治書院 吉岡平助

